

Title	新聞コーパスを用いた単語の「社会的コノテーション」についての研究
Author(s)	姜, 炅完
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57844
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	姜 灵 完 <small>かん りん ばん</small>
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 23319 号
学位授与年月日	平成21年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	新聞コーパスを用いた単語の「社会的コノテーション」についての研究
論文審査委員	(主査) 教授 石井 正彦 (副査) 教授 青木 直子 教授 田野村忠温

論文内容の要旨

本論文は、いわゆるコーパス意味論の方法にもとづきながら、新聞コーパスを言説の集合ととらえる独自の方法によって、単語の社会的コノテーションのより客観的な抽出と記述とを実現しようとするものである。論文は、序論・4章から成る本論・結論から構成され、別に資料および参考文献一覧を備える。その分量は、A4判105頁、400字詰め原稿用紙換算約378枚である。

序論では、単語の「社会的コノテーション」を「その単語の表す対象の、社会におけるあり方・ものの見方を反映した言語使用が繰り返されることによって、その単語に付加される暗示の意味」と規定し、単語の意味やコノテーションに関する先行研究を概観した上で、本論文の目的を、①単語の社会的コノテーションを客観的に抽出・記述するための計量的な分析方法の提案、②単語の意味における社会的コノテーションとデノテーションとの関係の解明、③異なる社会や時代における単語の社会的コノテーションの相違や変遷の記述、の3点と定める。

第1章では、「現代人」という単語を例に、単語の社会的コノテーションをより客観的に抽出・記述するための独自の方法を提案する。すなわち、新聞コーパスを、正しい用例の集合とのみ見るのではなく、社会のものの見方が反映した「言説の集合」ととらえた上で、それらから社会的コノテーションを抽出する方法を、「言説的意味のとりだし→言説的意味傾向のとりだし→社会的コノテーションのとりだし」の3段階から成る手続きとして定式化し、「現代人」については、6年分の新聞コーパスの調査にもとづいて、〈本来の人間性を失った存在〉〈過去から切り離された存在〉という二つの否定的な社会的コノテーションがとりだせると論じる。

第2章では、前章で提案した社会的コノテーションの抽出法に従い、同じく新聞に現れる連語「普通の人」の社会的コノテーションが多義であること、さらに、そうした社会的コノテーションの多義性がデノテーションの相対性に起因することを論証して、単語の社会的コノテーションがデノテーションの内容と密接な関係にあることを論じる。6年分の新聞コーパスの調

査によれば、「普通の人」には、「普通であること」を<否定的><肯定的><否定的>にとらえる3つの社会的コノテーションがとりだされるが、これは、「普通の人」のデノテーションにおける「優劣」および「強弱」の相対性にもとづいているという。

第3章では、異なる社会における単語の社会的コノテーションの相違を分析する。「現代人」「普通の人」と意味領域がほぼ重なる現代韓国語の「현대인」「보통사람」をとりあげ、日韓両社会それぞれのあり方・ものの見方を反映する社会的コノテーションの姿を論じる。たとえば、韓国語の「현대인」には、日本語の「現代人」とは異なる否定的な社会的コノテーションと、「現代人」にはない肯定的な社会的コノテーションとが見られるが、これは、日本社会とは異なる韓国社会の「현대인」のあり方を反映したものであるという。

第4章では、異なる時代における単語の社会的コノテーションの変遷を確認する。現代と明治・大正時代の「現代人」「普通の人」の比較を行い、「現代人」「普通の人」の社会的コノテーションが、過去の日本社会では、現代と異なるものであった可能性を指摘する。また、本研究で提案した言説としての新聞コーパスから社会的コノテーションを分析する方法が批判的社会分析に応用できる可能性について、「インターネット」「働く喜び」などを例に検討する。

結論では、本論文の結論および意義をまとめ、今後の課題を提示する。

論文審査の結果の要旨

単語の意味をデノテーション（明示的意味）とコノテーション（暗示的意味）とに区分することは伝統的なものだが、従来の語義研究はデノテーションを中心に展開され、コノテーションについては、理論的・記号学的な研究にとどまり、具体的な記述にまでは及ばなかった。そうしたなか、近年、スタッズらに代表されるコーパス意味論が、大規模なコーパスにおける単語使用のパターン、とくに、いわゆるコロケーションに注目して、単語のコノテーションをとりだそうとしていることは注目される。本論文は、基本的にはそうした発想・方法にもとづくものではあるが、コノテーションの中でもとくに「社会的コノテーション」というものを想定し、また、それを生み出している言説の集合として新聞コーパスを位置づけ、さらに、社会的コノテーションを生み出す基盤となる「言説的意味」「言説的意味傾向」という概念を設けて、社会的コノテーションの（スタッズらの方法に比べて）より客観的な抽出法を定式化したことは、日本語の語義研究・コーパス言語学的な研究に大きな貢献をなすものと言ってよい。社会的コノテーションおよびその抽出法の説明に、コノテーションを生じやすいヒト名詞「現代人」を用いたことも適切であり、連語「普通の人」も加えて、コノテーションの多義性とデノテーションとの関係、コノテーションの歴史的・社会的な変容など、新しい研究課題を見出したことも、対照言語学的な検討も含めて、本論文の方法によるコノテーション研究の今後の発展を期待させるものである。

ただし、社会的コノテーションのより客観的な抽出にこだわるあまり、その記述・分析がわずかな単語にとどまっていることには不満が残る。また、言説的意味傾向のとりだしの基準をコーパス・サイズにかかわらず一律に定めるところなどは、客観的というより機械的であり、言説的意味傾向から社会的コノテーションをとりだす手続きにも、なお分析者の主観的な判断に頼る側面が少なからず残されている。今後、質的研究などに見られるカテゴリー化の手法な

ども参考にしながら、より確かな方法に洗練していくことが望まれる。さらに、社会的コノテーションの一般性を確保するためには、新聞以外のコーパスを対象として間テクスト的分析を施すことも必要になるだろう。とはいえ、本論文が、コーパス意味論の基礎の上に立って、社会的コノテーションの客観的な研究に道を開いたことは確かであり、これらの問題点もその価値を減ずるものではない。

なお、2009年7月31日に本論文の公開審査を行い、最終試験を終えた。以上により、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。